

本間久雄のワイルド研究  
—— 昭和時代（戦前） ——

佐々木 隆

2007年4月

日欧比較文化研究 第7号

日欧比較文化研究会

## プロローグ

本間久雄(1886-1981)の明治時代、大正時代のワイルド研究についてはすでに発表しているので<sup>(1)</sup>、本稿では、昭和9年(1934)5月の『英国近世唯美主義の研究』(東京堂)を中心に上げながら、その側面についても論じていきたい。

### 1 本間久雄のワイルド研究の変遷

本間久雄は明治42年(1909)3月の『文章世界』(第5巻第4号)で「人生も自然も芸術の模倣也」を掲載し、ワイルドを論じて以来、明治44年(1911)3月の『早稲田文学』(第64号)の「オスカア・ワイルド論」を経て、その後もワイルド論を次々と発表し、大正12年(1923)10月には『唯美主義者 オスカア・ワイルド』(春秋社)を発表した。その後、昭和2年(1927)7月の『欧洲近代文芸思潮概論』(早稲田大学出版部)、昭和4年(1929)12月の『滞欧印象記』(東京堂)、昭和6年(1931)5月の『文学論攷』(東京堂)を経て、昭和9年(1934)5月の『英国近世唯美主義の研究』(東京堂)の発表に至っている。本間のワイルド研究の視点が *The Decay of Lying* から *De Profundis* へと変化している。その集大成が『英国近世唯美主義の研究』である。

### 2 本間久雄『英国近世唯美主義の研究』

本間久雄のワイルド研究最大の業績は『英国近世唯美主義の研究』(東京堂)である。本書は本間の博士論文であり、限定500部の出版である。構成は以下の通りである。

#### 第1章 唯美派の起源

第2章	唯美派の経路及び要素
第3章	唯美派の様相
第4章	オスカア・ワイルド
第5章	唯美主義芸術観
第6章	唯美主義と日本
第7章	唯美主義の衰頹
	参考書目の事

本間が『英国近世唯美主義の研究』で力点を置いたのは、「唯美派の運動をどこ迄も一個の社会的現象として観察しようとしたこと」と「この運動の要素——而も重大な要素の一つになってゐる『日本的なもの』を検討し、解説しようとしたこと」の2点である。<sup>(2)</sup>本間はこの運動の中心要素を「中世趣味」「生活美化」「異国趣味」の3点に要約し、この3つが如何に作用し合っているかを、ロセッティ(Dante Gabriel Rossetti, 1828-1882)、モリス(William Morris, 1834-1896)、ホイッスラー(James Abbott McNeil Whistler, 1834-1903)を代表として説明したのである。本間の研究の特徴のひとつに作家を個々に論ずるのではなく、対になって論じられている事である。<sup>(3)</sup>こうした手法により、ワイルド(Fingal O' Flaherty Wills Wilde, 1854-1900)の特徴がより鮮明に論じられることになったのである。本間はワイルド、エレン・ケイ(Elen Key, 1849-1926)、ペイタア(Walter Horatio Pater, 1839-1894)、モリス、シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)などを研究しているが、これは大きな視点から見れば「芸術と人生」のあり方を、時代を通して考察したことになる。

『英国近世唯美主義の研究』の「序」の中には

十九世紀の後半のイギリス文学の異色である唯美派の運動は、これを研究の対象とする時、さまざまな意味で多くの興

味をそそる。この運動が単に文学上、芸術上の運動であるにとどまらず、ひろく人生観上の、或は実際生活上の運動であったこともその一つである<sup>(4)</sup>

と、明言している。本間は『英国近世唯美主義の研究』を執筆するにあたり、早稲田大学海外研究生として英国へ留学(1928年3月～1929年3月)したことが大きく関係していることは言うまでもない。

本書を――殊に第三章『唯美派の様相』以下を草するに當って、文献的材料の上で、稿者の私かに意を強うしたことは、かの浩瀚な『ワイルド書目史』の著書スチュアート、メエソンが数十年に亘つて蒐集した参考資料を、稿者が数年前渡英した折に、或る幸運の機会に、図らずも手に入れたといふことと、今一つは、現行本の『ディ・プロファンディス』に漏れてゐるワイルド獄中手記の全部――現に大英博物館の保管にかかり、閲読禁止となつてゐる部分――所謂禁止本獄中を、ワイルドの遺子ホランド氏の好意で、これも稿者滞英中、全部手写して来たといふことである。蓋し、これらの材料は、唯美派運動、取り分けワイルド再認識の上に、稿者にとつて甚だ重要なものであつた。<sup>(5)</sup>

本間は「第4章 オスカア・ワイルド」以降でワイルドを本格的に論じている。第4章では、ワイルドが唯美主義へ傾倒していく過程をワイルドの大学生時代とアメリカ講演を中心に論じているのである。ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)からの影響については、1882年(明治15)のアメリカ講演の“Art and the Handicraftsman”で街路工事についてのワイルド自身の追憶を引用しながら、ロバート・シェラード(Robert Hargorough Sherad,

1861-1943)の *The Life of Oscar Wilde* とは別の立場をとる E. T. クック (Sir Edward Tyas Cook, 1857-1919) の *Studies in Ruskin* (1890) やウォルター・ハミルトン (Walter Hamilton, 1844-1899) の *The Aestheticism Movement in England* (1882) を取り上げ、ワイルドの初期の芸術観に影響を認めている。また、*De Profundis* でもワイルドの人生転機としてオックスフォード大学が言及されているが、ペイターとの出会いとギリシャ遍歴が大きな影響を与えたものとして取り上げた。これまでもワイルドへのペイターの影響についてはよく論じられていたが、ギリシャ遍歴に伴ったマハフィ教授 (John Pentland Mafaffy, 1839-1919) や詩 'Ravenna' については大きくは論じられてこなかった。しかし、本間の豊富な資料が、ワイルド像をより鮮明に浮き彫りにしたものとして考えられる。大学卒業後のワイルドについては、「審美的服装」について触れ、ノルダウ (Max Simon Nordau, 1849-1923) の *Degeneration* のワイルドについても引用している。「第7章 唯美主義の衰退」は「第1節 ワイルド下獄誌」「第2節 『ディ・プロファンデイス』考」となっており、本間が『ディ・プロファンデイス』に大きな関心を寄せていたことがわかる。

本間がヨーロッパ留学中に入手したスチュアート・メイソン編集のワイルド・コレクションは現在実践女子大学図書館に所蔵されている。ワイルド・コレクションについては、昭和4年(1929)12月の本間久雄「ワイルド研究資料蒐集について」(『滞欧印象記』東京堂)、平成元年(1989)11月の『実践女子大学図書館所蔵 オスカー・ワイルド文献目録』(実践女子大学図書館所)がよい参考となろう。他にも『英国近世唯美主義の研究』執筆にあたり注目するとすれば以下の文献もある。

昭和5年(1930)1月 「オスカア・ワイルド下獄記」(『改造』第12号第1号)

- 昭和 5 年(1930)12 月 「英国近代芸術に及ぼせる『日本』の  
影響」(『文学思想研究』第 12 卷、早稲田大学出版部)
- 昭和 6 年(1931) 5 月 「英国唯美主義の径路」「英国近代美  
術と日本」「オスカア・ワイルド下獄考」(『文学論巧』東京堂)
- 昭和 6 年(1931)11 月 「唯美主義とオスカア・ワイルド」(『綜  
合世界文学研究』春秋社)
- 昭和 9 年(1934) 3 月 「オスカア・ワイルドと日本」(『文学』  
第 2 卷第 1 号)
- 昭和 9 年(1934) 3 月 「オスカア・ワイルドと日本」(『芸術殿』  
第 4 卷第 3 号)

上記のものは、『英国近世唯美主義の研究』の一部になっているものである。段階を追って完成していく様相がわかる。また、下記  
のものは『英国近世唯美主義の研究』に直結するというよりは周  
辺的なものである。

- 昭和 4 年(1929) 6 月 「オスカア・ワイルドの墓」(『中央公論』  
第 44 年第 6 号)
- 昭和 4 年(1929)12 月 『滞欧印象記』東京堂
- 昭和 5 年(1930) 2 月 「人物研究 オスカー・ワイルド」(『世  
界文学講座』第 3 卷、新潮社)

特に、『滞欧印象記』については、本間久雄の英国留学中における  
ワイルド研究資料蒐集に関することが記述されており、前述の通  
り『英国近世唯美主義の研究』執筆への経緯を十分に伺い知るこ  
とができる。

### 3 本間久雄の研究課題

本間は文学批評においては多くの論文を書いているが、戯曲は

それに比べると少ない傾向にある。ワイルド劇についても同様であるが、日本におけるワイルド劇上演は、大正期に大きなピークを迎え、本間も大正2年(1913)に『サロメ』と『秋夕夢』(『近代』創刊号)、大正3年(1914)に『先代萩』と『サロメ』(『演芸画報』第8年第1号)など、『サロメ』の劇評なども寄せているが、ワイルドの戯曲の演劇研究については決して充分とは言えない。本間が恩師の島村抱月(1871-1918)の率いる芸術座と深いかかわりを持っていたことを考えると、今後さらに研究の余地がありそうである。清水義和(b. 1946)も「本間久雄の学位論文で最も奇異なのは、彼が、ワイルドの『獄中記』に大半を費やしてしまい、演劇論を殆ど書かなかった事である」<sup>(6)</sup>と指摘している。

しかし、いずれにせよ、ワイルド劇研究については、現在に至るまで日本におけるワイルド研究の大きな課題と言えるのだ。同じような現象はシェイクスピアの受容でも起こっている。作品研究や本文研究は進んで行われている。一方、劇評は行われているが、上演については、いわゆる演劇研究、上演研究となると、その量はかなり少ないのである。

#### エピローグ

本間のワイルド研究は昭和9年(1934)5月の『英国近世唯美主義の研究』(東京堂)として確かに集大成された。しかし、本間が新たな研究テーマに向かって出発したのもまた、この昭和戦前なのである。それは、本間が外国文学、特にイギリス文学の日本における受容や影響関係を強く打ち出した『明治文学史』の執筆である。このテーマは改訂等が行われ、戦後によりやくまとまるのである。昭和戦前の本間のワイルド研究は『ディ・プロファンディス』に「悲哀」の精神を見出すところにひとつの終結をみることになるが、本間のワイルド研究がこれで終結したわけではない。戦後になると、本間の育て研究者や若い研究者が日本ワイルド協

会を設立するまでにワイルド研究が日本でも盛んになるのだ。

## 注

- (1) 佐々木隆「本間久雄のワイルド研究——明治時代——」(『異文化の諸相』第26号、2005年12月) / 佐々木隆「本間久雄のワイルド研究——大正時代——」(『日欧比較文化研究』第6号、2006年4月)
- (2) 本間久雄『英国近世唯美主義の研究』(東京堂、1934年5月)、p.2.
- (3) 清水義和『ショー・シェークスピア・ワイルド移入史』(文化書房博文社、1999年3月)、p.302.
- (4) 『英国近世唯美主義の研究』, p.1.
- (5) Ibid., p.3.
- (6) 『ショー・シェークスピア・ワイルド移入史』, p.321.

キーワード：本間久雄、ワイルド、唯美主義

\*本稿の一部は佐々木隆「書誌から見た昭和時代(戦前)のワイルド受容研究」(『日欧比較文化研究』第3号、2005年4月)で発表したものを中心にして、本間久雄の部分を中心にさらに加筆したものである。

本間久雄年譜(昭和戦前編)

昭和2年(1927)7月 『欧州近代文芸思潮概論』(早稲田大学出版部)を出版。

昭和3年(1928)3月 早稲田大学海外研究生として渡英。(～昭和4年3月)

DulauでMasonの“Wilde Collection”を入手。Wildeの次男Vyvyan Hollandに会う。



- 昭和4年(1929)6月 『中央公論』(第44年第6年)に「オスカア・ワイルドの墓」を發表。
- 昭和4年(1929)12月 『滞欧印象記』(東京堂)を出版。
- 昭和5年(1930)1月 『改造』(第12巻第1号)に「オスカア・ワイルド下獄記」を發表。
- 昭和5年(1930)2月 『世界文学講座』(第3号)(新潮社)に「人物研究, オスカア・ワイルド」を發表。
- 昭和6年(1931) 早稲田大学教授となる。
- 昭和6年(1931)11月 早稲田大学編『総合世界文学研究』(春秋社)に「唯美主義とオスカー・ワイルド」を發表。
- 昭和7年(1932)10月 翻訳『幸福な皇子』(春陽堂)を出版。
- 昭和9年(1934)1月 『文学』(第2巻1号)に「オスカア・ワイルドと日本」を發表。
- 昭和9年(1934)3月 『芸術殿』(第4巻3号)に「オスカア・ワイルドと日本」を發表。
- 昭和9年(1934)4月 『文芸思潮研究』(平凡社)に「オスカア・ワイルド伝」を掲載。
- 昭和9年(1934)5月 『英国近世唯美主義の研究』(東京堂)を出版。
- 昭和10年(1935)7月 『明治文学史』(上巻)(東京堂)を出版。
- 昭和11年(1936) 『英国近世唯美主義の研究』により文学博士。
- 昭和12年(1937)10月 『明治文学史』(下巻)(東京堂)を出版。
- 昭和18年(1943)10月 『續明治文学史』(上巻)(東京堂)を出版。